

## 論 文 要 旨

氏 名 陳 婧

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

都賀庭鐘の読本における中国文学の受容と変容——『英草紙』、『繁野話』を中心に

論文要旨（別様に記載すること。）

- (注) 1. 論文要旨は、A4版とする。
2. 和文の場合は、4000字から8000字程度、外国語の場合は、2000語から4000語程度とする。
3. 「論文要旨」は、CD等の電子媒体（1枚）を併せて提出すること。  
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

## 論文要約

江戸時代の日本では、町人階層の勢力がますます強くなり、それに伴って、町人文化も発展を遂げていった。その中で「読本」という庶民文学様式が代表的なものとして挙げられる。読本は十八世紀中葉から幕末頃にかけて上方、次いで江戸中心に刊行された、近世小説の一ジャンルである。日本の読本小説という新しい文学様式は中国白話小説から重要な影響を受けたのである。中国の明清白話小説は長い間にわたる創作経験を蓄積し、成熟度の高い形式として洗練されていった。俗語の使用においても、テーマの表現においても、また筋の構想においても、小説の比較的完全な形態を備えていた。江戸時代の知識人は中国の明清白話小説からこれらの創作体験と言語使用について啓発を獲得して、明清白話小説の内容からも大量の題材を翻訳、または翻案し、読本小説の風潮が江戸文壇を席捲していった。その中で、読本小説の始祖と称される都賀庭鐘は注目される。彼が著した『英草紙』は近世読本の開始を告げた記念作品で、のちの『繁野話』と共に、初期読本の代表とされている。庭鐘の読本作品の誕生は中国文学と緊密な関係があり、特に『三言』に学んだ所が多い。馮夢龍の『三言』（『喻世明言』、『警世通言』、『醒世恒言』の総称）は中国短編白話小説の傑作として、中国文学史上重要な位置を占めている。都賀庭鐘のこの2冊の代表的な作品と馮夢龍の『三言』の関係を考察することは、江戸文壇が中国文学からの深層の受容状況を検証することであり、日中文化交流史において重要な意義がある。本論文は、馮夢龍の『三言』という白話小説集と都賀庭鐘の『英草紙』と『繁野話』を研究の対象として、両者の関係を比較したものである。

『英草紙』と『繁野話』について、すでに多くの先行研究が行われており、特に『三言』から深層の受容が見られることは既に先行研究が明らかにしているが、やはり考察の深度、角度は不十分である。庭鐘の作品に見られる「変容」の手法及び日本文学固有の真髓に関する研究が不足し、庭鐘の価値観と道徳の傾向について、まだ明らかにされていない。そして庭鐘の道徳観念の源流についても全面的に論証していない。したがって、これらの問題を解明するため、本論文は主に作品の「変容」の表現と手法、及び作者の思想根源の問題を中心として、論説を展開していく。

本論文はまず、江戸時代の日本文壇および、中国文学の日本への伝播について総括する。これを背景に、都賀庭鐘の読本が生み出された必然性と可能性を浮き彫りにする。そして粉本と翻案作品の類似点を分類して論じ、横の比較分析手法によって、庭鐘の読本と中国白話小説の共通点について詳細に、かつ全面的に考察していく。その共通点を分析した結果、『英草紙』、『繁野話』と『三言』は物語の表現において共通性が見られ、言語表現の相似性も著しい。庭鐘の初期読本は中国文学から重要な影響を受けたことが見出される。実は庭鐘は『三言』だけではなく、中国のほかの作品と文学思想からも影響を受け、それは中国的な表現モチーフとは言え、中国文学はいかに庭鐘に影響を与えたかが窺える。本論文は都賀庭鐘の読本作品と中国小説の相違点をも全面的に考察し、その相違から庭鐘の作

品にみられる日本の特徴を検討した。その結果、『英草紙』と『繁野話』は日本独特の文化にふさわしい変容を遂げたと思われる。翻案作品は和歌などの伝統的な文学形式を通して、「物のあわれ」の文学傾向を表しているだけではなく、更に日本の風俗、民情や文化の雰囲気など日本文化の特色を具えたものに注意し、取り換えまたは添加の手法で、中国の作品を日本の趣向を持つ作品に翻案したのである。庭鐘も日本の歴史に注意し、歴史物語を翻案する際、庭鐘は中国の白話小説を模倣する一方、日本の歴史に人物と素材を取り、日本の歴史と文学から相応しい内容を選んでいる。日本の歴史物語の詳細な説明は、庭鐘の初期読本が中国の小説を日本化した有力な証拠である。そして、道教崇拝を排除することなど中国情緒の消去も作品の日本化する手法として、庭鐘が粉本を日本人の考え方に合わせたためと考える。第五章では、登場人物を分類し、翻案作品に見られるテーマの変容を分析する。悟ることができる男性と女色に溺れる男性の人物像の分析を通して、男性へ教誡するテーマを打ち出す。また、貞節を守ることができない女性、社会に反逆する女性と社会規範に従う女性の人物像を分析する。女性への教誡を通して、男性への教訓も強調している。庭鐘の価値観は翻案作品の変容したテーマに見出され、庭鐘は儒教的なモラルを基準とし、人々にこの道徳に従うように戒める。庭鐘が提唱するのは儒教的な社会規範で、女性の評価基準の本質は男性優位論と言える。庭鐘は儒教的な道徳意識を男尊女卑の考えと交錯させ、教訓のテーマを強調すると言える。

儒教的な道徳意識は翻案作品において統一的な価値観とされ、庭鐘も幾つかの手法を使い、この価値観を提唱し、教誡のテーマを強調するのである。まず、わき役の利用方法である。庭鐘が粉本には見えない人物を登場させ、男性主人公の悔い改め、正道に立ち直るきざしに正当な理由を与える。また、第三者の肯定的言葉を添加し、男性主人公への非難を弱め、「子弟の戒となす」という意図を表している。そして、作者は人物像の現実性と普遍性を重視し、主人公の人柄と性格を誇張せず、現実的に描いている。実は作品の中で、人物の極端な性格は人物像を際立たせ、読者に深い印象を与えることができるのに対して、人物のありふれた性格は普通の読者に共感させ、一般の人に啓発を与えることができる。したがって、庭鐘もこの文学手法をうまく利用して、翻案作品で教誡のテーマを強調するのである。更に、作者はテーマと関係があるところに多く筆墨を置き、筆墨の増減を通して、作品のテーマを強調するのである。

第七章では、粉本の作者馮夢龍と比較しながら、庭鐘の道徳観念の源流をたどってみた。馮夢龍は「勸善懲惡」の小説観を小説に導入し、作品を警世、教化の道具にしようとする。あるいは、人間の「真情」の尊さを描き、「真情」観を提唱するのである。「勸善懲惡」の小説観にせよ、「真情」観の文学的傾向にせよ、皆素朴で庶民的な観念と純粋な感動を表し、民間文学の特徴を含んでいる。馮夢龍の小説観の形成の一因は当時の哲学思潮において代表的な人物李贄と緊密な関係があるためである。馮夢龍は李贄の「童心説」の影響により、人間の純粋な感情を重視している。したがって、情と理との自然なバランスの上に成り立っている素朴で庶民的な文学観は馮夢龍の特徴だと言える。馮夢龍に対して、庭鐘の生き

た時代は、徂徠学は一世を風靡して、「国家安寧」と「治国平天下」の思想が提唱されていた。現実秩序と世の安寧を守るため、徂徠は知識人の志すべきはあくまで経世済民の道であると指摘しているのである。庭鐘もこの文化万般に影響を及ぼした徂徠学から深い影響を受け、徂徠学の「経世済民」の思想に着眼するのである。したがって、庭鐘が読本作品に提唱するモラルは庶民的感情と利益から発するものではなく、統治者の支配と社会の安定のためのものである。『英草紙』、『繁野話』の中に、庭鐘の文学観の根本は「治国平天下」という政治性にあり、その源流は荻生徂徠の思想だと言える。しかし、庭鐘中年以後、社会に動揺が生じ、権力者の幕府は内憂外患に直面する。庭鐘の思想も社会の変化に従って変化したものと思われる。幕府の卑劣で強圧的な態度に憤りを覚え、朝廷いじめに心を痛めた庭鐘は、幕府嫌悪ムードを作品に表しているのである。『莠句冊』等を経て、『繡像義経磐石伝』に至ると、庭鐘の作品に、徂徠思想の影響が弱くなり、徂徠傾倒の度合いが軽微になっていくと言える。

中国文学の影響で生まれた庭鐘の読本作品は、庭鐘の優れた創作手法で発展を遂げたのである。都賀庭鐘が『繁野話』を創作したとき、粉本から性格と事件との関連、伏線と結末の照応という構成手法を学んでいる。彼の翻案作品の構成は日本の以前の作品よりもっと緊密で、登場人物にもより明確な性格を賦与する。八文字屋本の様式を克服して、浮世草子のマンネリズムに陥った文風からも抜け出したと言える。彼の小説創作法に対する業績は江戸時期の作家の文学創作に芸術の形式の参考を提供した。また、庭鐘の初期読本は後世文壇へも重要な影響を与えた。都賀庭鐘の初期読本が呼び水となり、『三言』は次々と日本の物語に翻案され、白話小説の伝播が進められたのである。庭鐘に感化を受けた読本作品の中に、庭鐘と緊密な関係を持っているものも幾つかある。例えば、『雨月物語』には、『英草紙』と『繁野話』の二書がもたらした深い影響が見出される。式亭三馬や山東京伝などの作品も庭鐘の初期読本から重要な影響を受けたのである。庭鐘がのちの作者に与えた広い影響が窺える。庭鐘の初期読本以後、読本文学は興り始め、読本作品は次々と世に現われた。十八世紀末から舞台は江戸に移って、長編小説が登場し、曲亭馬琴を代表として多くの作者は長編小説を精力的に述作することになる。庭鐘は初期読本の代表的な作家として、近世の文学に重要な影響を与えただけではなく、近世以後の日本文壇にも深遠な影響を与えたのである。一例として森鷗外の『舞姫』が挙げられる。

したがって、都賀庭鐘は近世読本作家の始祖と称されるわけである。彼は『三言』を粉本として翻案作品を著し、日本の伝統的な要素を作品に取り入れた。中国白話小説が江戸文学に重要な影響を与えたことはよく分かる。翻案作品は中国小説の影響を受け取るとともに、日本文学の伝統と日本文化の特徴も表れ、先進的な文学形式を日本的な要素と結びつけた文学傾向をよく体現している。『英草紙』と『繁野話』は日本独特の文化にふさわしい変容を遂げたのである。庭鐘は翻案作品に自らの価値観を表し、儒教的道徳を人物評価の基準とし、儒教的な社会規範に従うように提唱している。その道徳観念の源流は徂徠思想にあると考えられる。『英草紙』と『繁野話』は日本の初期読本の代表として、読本文学

の発展に強固な基礎を打ち立て、後世の文学に重要な影響を与えた。